

スウェーデンにおける最後の時

松平忠志(応化会)

日本尊厳死協会 北海道支部のオンライン講演会に参加しました。

講演の要旨を以下に示します。

北海道支部

☎ 0120-211-315 ✉ hokkaido@songenshi-kyokai.or.jp

オンライン講演会

日程◎ 1月28日(土) 午後3時～4時半

テーマ「スウェーデンにおける最期の時」

講師◎ 長谷川佑子(ウプサラ市立認知症ケアホーム、ウプサラ大学アカデミスカ病院)

定員◎ 500人(先着順、会員・非会員を問わず無料)

主催◎ 日本尊厳死協会 北海道支部

申し込み◎ 当協会北海道支部ホームページ

講演要旨

『穏やかに。』が終末期でのテーマであり、最期には枯れるように息を引き取るということが自然な死であると多くのスウェーデン人、とくに高齢者やその家族、医療福祉スタッフは言います。病気や身体的不自由のある状態でも最期まで自宅にいたいと考える高齢者も多いです。24時間体制のケア施設入居者は慣れた環境、知っているスタッフの中で最後まで過ごしたいと考えています。また、病院は治療をするところであり、穏やかな看取りには適していないという共通理解もあります。最後まで延命治療を病院でしてほしいと考えるスウェーデン人はほとんどいません。人生の最期に「頑張る、耐える」必要はないと考えています。

私は、スウェーデンで看護師として高齢者の医療や福祉に携わって10年になります。以前、日本の急性期病院で、心電図の波形を見て、何度も血圧を測り、痰の吸引をしたり、と慌ただしく緊張感のある空間で終末期ケアをしておりました。

その後、スウェーデンへ移住し、大学病院の老年期内科で終末期の患者さんの血圧を測ろうとした時、医師に「何のために測るの？ 患者の安楽のために役に立つの？」と言われました。患者の緩和のために必要なことだけをする、というのがスウェーデンでの終末期です。人生の最期の時間を過ごす人の痛みと不安を最大限抑え、そばに座って手を握り、一緒にいる。家族にゆっくりと話を聞き、悲しみに共感するという看取りに関わった時に、なんとも穏やかであることにショックを受けました。とくに、終末期に点滴をせず、上手な水分コントロールさえできれば患者

さんの苦痛を伴う痰の吸入をしなくてもいいのです。

スウェーデンの子どもたちは、幼児教育から自分の考えを持つこと、自分の意見をしっかり周りに伝えるコミュニケーションの重要性、違った考えを尊重し合うことなどを学びます。親子関係でも自己決定を大切にすることに変わりありません。患者が自分の意思を示せないケースでは、医師が家族に以前の患者の意向を聞きますが、家族が延命治療を希望しても優先されることはありません。高度治療に関しては、患者の医学的所見から治療が適切なのかどうか判断されます。

日本でも今、自己決定の重要性が求められていますが、延命治療を含めた終末期医療の決定のあり方は、まだ十分に議論されていないようです。スウェーデンにおける終末期医療の決定やケアの実際、こちらでの問題点にも触れながら、現場の様子を紹介しつつ、皆さまのご意見もお聞きできればと思っています。

ウプサラの街並み
(大聖堂と国旗)



セミナー「リビング・ウイル作成講座」

日程◎ 偶数月に開催。

2月14日(火)10時～11時

講師◎ 岡田七枝(支部理事)

内容◎ 日本尊厳死協会の

リビング・ウイルについて解説し、
実際の作成・登録方法を説明する。

対象◎ リビング・ウイルについて学びたい方
(会員、非会員を問わず)

定員◎ 100人(無料、先着順)

形式◎ オンライン(ZOOM)

申し込み◎ 北海道支部ホームページに

2月13日(月)までにお申し込みください。

少しばかり、小生のコメントを次ページに記します。

多くの方が、自宅で、ポックリと死にたいと希望しても、我が国では、その希望は叶いません。ところがスウェーデンでは、9割は自宅で死ぬとのこと。

人口は1000万と少ないため、国民の目が届くのだそうで、税金負担は大きいですが、医療は公営で、私立の病院はなく、国民皆保険で費用は安く、教育はほとんど無料。

私が特に感銘を受けたことは、死に臨んで日本では、家族は“一日でも長く生きて。”そして“死の瞬間には立ち会いたい。”と希望する。

そのために医師も看護師も、死の瞬間まで治療を続け、臨終の時を予測し、家族に知らせる時期を決めるべく、常に張り詰めた緊張状態にある。

それに対してスウェーデンでは、回復の可能性が無くなったら、延命治療ではなく、緩和ケアに移る。イタミを取ることに、不快感を除くことなどは、看護師の仕事で、医師の手は、原則として離れる。ドクターは給与が高いので、緩和ケアにはタッチしない。

最も重視されるのは、死の瞬間に、家族の誰かが“手を握って見送ること”だと言うのです。

(私は30年前に90歳の母を看取ったのですが、その経験から、完全納得です。)

家族の都合がつかない時は、看護師に頼むこともあるよし。

日本は“過剰医療”で、国家財政も破綻状態。正反対です。

なお、本講演の動画は、尊厳死協会北海道支部のHP上に公開されており、何時でも、すべてを視聴できます。

<https://songenshi-kyokai.or.jp/hokkaido/archives/1230>

以上